

短所は後からでもカバーできる — 逆接表現による文境界を越えての談話焦点の効果 —

○井関龍太^{1*}・楠見 孝²

(¹日本学術振興会・²京都大学教育学研究科)

Key Words : 接続表現, 談話焦点, 印象形成

“和也は知ったかぶりをするが、欲がない”のような形で、逆接の接続表現を用いてネガティブなパーソナリティ特性を提示すると、順接の接続表現で同じ特性を提示した場合に比べ、人物に対する好ましさの評価が向上することがわかっている(井関・菊地, 2007, 認知心大会)。この逆接表現による印象改善の効果は何度か追試されてきたが、これまではすべて一文の材料で検討されてきた。人間による文処理の方略としては、文末・節末における統合がしばしば指摘される(e.g., Haberlandt & Graesser, 1989)。文を構成する単語の情報が逐次的に与えられる場合、ある程度の統語的・意味的なまとまりを形成できるだけの情報が与えられてから処理を始める方が効率的なことがある(様子見方略)。このようなまとまりとしては、一般に、文や節が有用である。そのため、文境界をまたいで提示された情報は、互いに統合されにくくなる場合がある(Daneman & Carpenter, 1983; Guzmán & Klin, 2000)。このことから考えると、逆接表現を用いたこれまでの研究は、節と節の対比によって印象の改善が起こることを示唆しているものの、対比される特性を別の文の中で提示した場合にも同じ効果が生じることを保証しない。本研究では、対比される特性を別の文の中で提示した場合にも逆接表現による談話焦点効果がみられるかを検討する。

方法

実験参加者：調査会社に回答者として登録した大学生及び大学院生。実験aに63名(女性25名)、実験bに72名(女性29名)が参加した。
要因計画：2(特性語：ポジティブ・ネガティブ)×2(接続法：逆接・順接)×2(特性語の位置：先行・後続)の被験者内計画。実験aは2文、実験bは1文の材料を用いた。

材料：実験aでは、逆接の場合は“Aは[特性語1]だ。けれども、[特性語2]だ。”、順接の場合は“Aは[特性語1]だ。そして、[特性語2]だ。”という形式で56組の材料を作成した(Table 1を参照)。実験bでは、同様に、逆接の場合は“Aは[特性語1]だけれども、[特性語2]だ。”、順接の場合は“Aは[特性語1]で、[特性語2]だ。”という形式の材料を用いた。Aの部分には人名(“和也”, “優子”など)、特性語の部分には、青木(1971)から選んだパーソナリティ特性語を当てはめた。各文について、一方の語は常に中立語、他方の語は感情価のある語(ポジティブorネガティブ語)であった。

手続き：実験参加者は、各人のPCモニター上で材料を読んで、それぞれの人物をどのくらい好ましいと感じるかを5段階で評定した(1=まったく好ましくない~5=とても好ましい)。

結果と考察

実験a：各条件の平均評定値をFigure 1に示した。2(特性語)×2(接続法)×2(特性語の位置)の分散分析を行ったところ、3要因の交互作用が有意であった($F_1(1, 62) = 17.82, p < .01$; $F_2(1, 55) = 19.74, p < .01$)。ネガティブ語について検討すると、接続法×接続語の位置の交互作用が見られ、逆接表現によって、好ましさの評価が向上することが示された($F_1(1, 62) = 5.51, p = .02$; $F_2(1, 55) = 4.00,$

$p = .05$)。また、ポジティブ語についても交互作用が見られ、逆接表現によって好ましさの評価が低下した($F_1(1, 62) = 17.99, p < .01$; $F_2(1, 55) = 14.15, p < .01$)。

実験b：各条件の平均評定値をFigure 2に示した。実験aと同様に3要因の交互作用が有意であった($F_1(1, 71) = 12.91, p < .01$; $F_2(1, 55) = 8.31, p < .01$)。ネガティブ語についての結果は実験aと同様であったが、ポジティブ語については、特性語が中立語に先行するときに接続法の効果が有意でなかった。

ポジティブ語についての評価の違いが1文か2文かの違いによるものかを確認するため、実験a, bのデータを組み合わせての分散分析を行ったところ、4要因の交互作用は有意でなかった($F_1 < 1$; $F_2 < 1$)。このことから、接続表現による談話焦点の効果には、文境界を越えるか否かで違いは生じないと考えられる。そこで、いったんネガティブな情報を提示し終えた後でも、改めて逆接表現を用いて他の情報を提示することによって、十分な印象改善の効果が得られるものと思われる。ただし、今回の実験では材料が2文のみであり、特性語と接続語が非常に近接していた。あいだに他の情報が介在する場合などについて、今後さらに検討の余地がある。

Table 1 使用した材料の例(実験aのネガティブ語の場合)

先行-逆接	和也は知ったかぶりをする。けれども、欲がない。
先行-順接	和也は知ったかぶりをする。そして、欲がない。
後続-逆接	和也は欲がない。けれども、知ったかぶりをする。
後続-順接	和也は欲がない。そして、知ったかぶりをする。

※非中立語に下線を付した。実験フォームには下線はなかった。

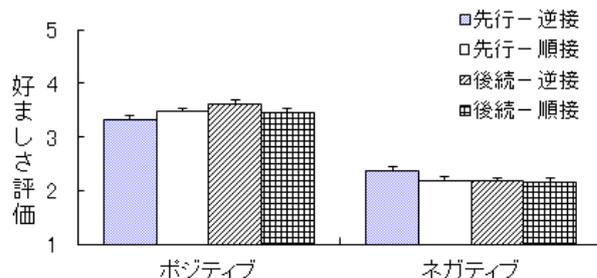


Figure 1 2文の場合(実験a)の好ましさ評定(バーは標準誤差)

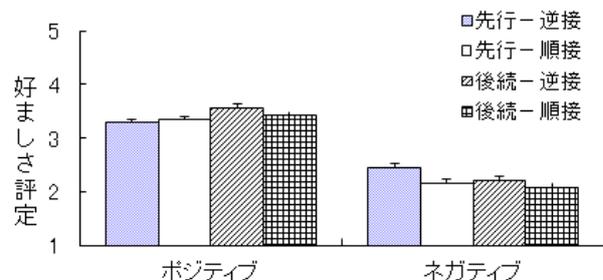


Figure 2 1文(実験b)での好ましさ評定

※本研究の実施に際して、日本学術振興会(特別研究員奨励費)の支援を受けました。

(ISEKI Ryuta and KUSUMI Takashi)

この原稿は日本認知心理学会の許諾を得て転載しています。
出典は、日本認知心理学会第9回大会発表論文集(p. 71, 2011年)になります。